

其のものは價値ではない、それは使用によりて初めて價値づけられるといつて居られる。黄金と石との比較は成立しない、何となれば時と場合によりて一般の原則は破れるであろう、さればそこに人生があり、生活があるのである。吾人の理想的人生とは實に現實の相、即價値創造への道である。

宗祖の法華經流布の生涯は實に劇的であつた、宗祖の眼に映じた社會現相其ものは一つのドラマであり、法華經は丁度脚本の如く佛陀は舞台監督の如くであつた。而して宗祖自身は或場合にはこの劇中に於いて獨占的の俳優を勤め、又或る場合には觀覽席より演劇に對して鑑賞する第三者の地位にあつて正當の批評を下しつゝ其現實の血と涙とによりて人類永劫の爲に法華經の尊さ、及び價値意義を示されたのである。(完)

微かなる者の信仰

大 澤 惠 宏

人間はその本性として、現在の自分より、よりよき自分を見出さんため絶えざる努力を惜しまない。人間の歴史はそれを具体的に物語つてゐる。

私達は死を恐れる。それは私達の人生を閉づる最終の幕だ。たとへ死を脱し得なくとも死の幕の日も遅からん事を祈つて息まない。又私達は善い事を爲さんとし、善い結果を得んと努める。人間はそれがためどれ程苦む事か、この苦しみの連続が人生の一面と云はれよう。而し人間は生れ乍らにしてそうさせない他のものを持つてゐる。その或るものが自らをして徒らに泥中のモガキに終らせしめる。かく人間は相容れない二つの働きにわざわひされて一生を終るに過ぎない。こゝに人間としての弱々しい誰かにすがろうとする淋しさ、而し純な氣持の——しいて云へば信仰の萌の——現れが見える。

畏友にか、先生にか、神か、佛か、生まれ自分より偉大なるものに頼らふとする。さなくば自分自身にすがつて深い思索的な生活を始めようとする……而しその究極は宗教の世界を認めざるを得ぬに違ひない。「浅い哲學は無神論に導き深い哲學は宗教に引き入れる」と云つたのはある哲學者だつた。なやみ多き人間は宗教を持つてゐない迄も宗教に行くべき心をば具へてゐる。私は日蓮聖人によつて生さるべき因縁を持つて生れた。聖人は私の全体であり又理想でもある。聖人の實現された理想は實現すべき私の理想である。私は平和な愛の光をあたへる宗教的なその理想に就いて考へて見る。佛に救はれる事、——神と云つてもよい——神の力に依つて神の世界へ移される事、云ひ換へると

佛らしさを持つ人間に還へる事がそれである。私はこの事を法華經で教へられた。法華經には二ツの傾向がある。その一ツは、早くいへば——この宇宙はそのまゝ私等人間のものである。佛の世界は只その中に含まれて居るに留まる。たとへ佛たり得る性質を持つて居ろうとも人間はあくまで人間、自然界はあくまで自然界である。魂は自由に佛の世界に遊び得ようと相は私達の見るまゝ、見えるまゝの宇宙を出でず机上の論として何處までもそれに留まつてそれを越えない。要するに信仰の世界、感應の世界ではない、眞實の世界、一元の世界ではない。これを迹門の教と云つてゐる。

その二ツは、この宇宙はこのまゝ佛のそれである。人間も自然界も皆その中に含まれてしまつてゐる。善く見えるもの、悪しく見えるものの區別のない一元の世界である。

要するにこの宇宙は一佛陀の現れであり統一であつて理知の世界ではない。この約束は何時から何時迄……と云へばそれは始めもなく終りもない、誰がそうであり——何がそうでない……と云へばそれも極みがない。其の佛は時間空間共に無限である。過去三千年印度に出でた釋尊を一層理想化し統一化した斯様な佛を本佛と云ひ、斯様な教を本門の教と云つてゐる。

前者は冷やかに佛たり得るの理を教へ、後者はそれが一層究竟し遂ひに宗教にまで轉開して現實の私をそのまゝ佛へ道く——赤子に對する親の慈しみそのものを以て——。血に慘む聖人一生忍難の行

化も後者の徹底した信仰による。この信仰こそ一人間たる聖人をしてよく宗教的偉人となしたのである。以上の如き本門の教を根據として本佛を自己の中に見出すのが私の理想であるべきであつて他に何者もない——と私は考へる。

而し斯様に考へて來た魂は、何かのハズミでそう考へさせない他の魂の動きによつて壓倒され勝ちである。そして再び矛盾の人間に復つて矛盾の人生を見る、人生を棘の旅路だと思ひ、又そう思はされる。光明よりも暗黒と考へさせられる事が多分にあり過ぎる。

かくして私の心に自分より出でて而も自分自らでは解決し得ぬ悩みが續く、そしてその弱さはやがて再び理想への憧れに移つて行く。悩みから憧れへ、憧れから悩みへの、この苦しみを常に持つ人間は己が精神の安定を宗教の中に見出す。佛への憧れ、信仰は己が理想を實現させて止まない。宗祖はこの氣持を唱題の中に見出された。そしてその七字は私達の唯一のあこがれのまゝである。七字を唱ふる所そこに佛の偉大な力が私達生命に働きかけその眠れるを呼び醒して佛と共にある事を意識させる。正しき自己意識を持つ事は宗祖を意識する事であり唱題に餘念のない事である。

なぜそうなのか？ と疑ふ者にはその疑を信に換へない以上永久に謎の世界である。とまれその七字は、佛の句を以て私達の魂の奥に浸み入り私達をして理想の世界へ引き上げる神秘的な要素を含んで

ゐる。聖人の魂に觸れた佛を或は妙法蓮華經とも云ふ。

私は最早これ以上知る事よりも心の奥底から流れ出る清い唱題に依つて求めて息まない理想郷が現れるやうな氣がする。七字を唱ふる時そこに自ら出ずる清くして樂しさを持つたる力強さを感じる事がそれではなからうか。かくしてこそ宇宙は和光の輝きに充ち、自然界は愛の衣に包まれ、私達は絶間なき慈悲の恵みに浴する、老も若きも醜きも美しきも皆法衣を纏つて苦をば苦とさとり樂をば樂とひらき清く樂しい人生と變るのではなからうか。

斯様に辿り來て見ると私の周圍は朗かに明るく、生に無限の喜びを感じ、同時に又死に對して僅少の恐れをも持たない、——生きる事も死ぬる事もそれは恰も苦をば苦とさとり樂をば樂とひらく氣持になるやうな氣がする。悟りの境地に出入するこの世界では最早理窟めいた事を望まない。

より以上宏く知る事よりもより以上深く自己を視つめるべく務めよう。そして私は聖人を顧みる事によつて、唱題する事に依つて忘れ勝ちな「佛の自分」に還へろう。

x

x

x

x

かくて私達の爲すべき總てが判つきりしたのではあるまいか。間違ひ易い人生にあつては私はこの唱題を善き道連れとして確實な歩みを運びたい。